



昭和23年6月13日 小金井東宮仮御所にて御年14歳の皇太子殿下とテニス選手たち 右から2人目が著者

皇太子殿下テニス日記

テニスと私

石井小一郎


1928

皇太子殿下のテニスのコーチを私がお引受けしたのは、昭和二十二年十月のことでした。殿下は学習院中等科二年に御在学、御年十三歳で、まだ頭も丸刈の少年でありました。

殿下は軟式テニスを級友と少しやっておられ、御乗馬はすでに七歳の時から始められたよしで、他に弓術をやっておられました。テニスを選ばれたことについて、その前年から殿下の御教育に關する参与となっておられた小泉信三先生がこれをおすすめしたという人がありますが、これは誤りで、先生は趣味を強制されるような方ではありません。ただ、先生は、テニスをやる以上は、国際的な硬球を正式に習うべきだといわれて、そのコーチも現役の学生よりも、子供のある年配の人の方がよいだろう、といわれたようです。

私の所へは、宮内庁式部官長の故松平康昌氏が見えましたが、この方は東京ローンテニスクラブの会員で、庭球界のことには明るい方でした。私は勤務先の三菱地所会社の了解を得て、それから、小泉先生ほか一、二の先輩に相談した上で、この大役をお引き受けした次第でした。

当時、東宮御所は都下の小金井にあって、そのコートで毎週一回、三、四時間ずつ御指導中上げました。私のコーチの日以外に、学習院の庭球部員としての御練習もあったわけで、そこでは当然、一部員として、コートの掃除や、ライン引きなどもやっておられた時期がありました。

なにぶん、皇太子という特別な地位におられるため、単に学習院の授業を受けられる他に、課外講義や、御見学や、各界の一流の人々によるいわゆる御進講がたくさんあって、まったくお忙しい御日常でした。したがって、毎週一回、三、四時間をテニスの時間としてお割きになるのは容易なことではないと思われましたが、最初の四年間は、ほとんど確実にこれが実行されました。このことは、もちろん殿下がテニスがお好きで、御熱心であることにもよりますが、小泉先生始め殿下の御教育に責任のある方々が、教育上、スポーツの持つ重要性をよく理解しておられた結果であると思います。

小泉先生は、昔慶應のテニスの名選手（軟球時代）であり、私の時代の庭球部長でもあったので、殿下に対して、対校試合の選手を訓練するようなハードトレーニングを期待しておられたらしく、私のコーチの仕方が初めは少し甘いとお考えになったようでした。というのは、元来私のコーチはやかましくて、ずいぶん選手を泣かしたことがあったのですが、殿下の場合は、前述のように御勉強の方が非常にお忙しいために、テニスだけが楽しみの時間のようにお見受けしましたし、まだ中学生でもあられたので、いわゆる短期講習会的でなく、ゆっくりやるような方針をとったからでした。

そんなわけで、私は主として殿下の中等科、高校、大学の学生時代に、テニスのコーチとして東宮御所に伺っております。その間、殿下の夏休みに、沼津の御用邸や、軽井沢、あるいは那須へもお供いたしました。したがって、東宮大夫の故野村行一先生、戸田、黒木兩侍従を始め、東宮職の方々と寝食を共にさせていただきましたが、殿下にお仕えしている方々が、身分の上下を問わず、すべて御自分たちの個人的榮譽とか利害とかいうことを少しもお考えにならず、なんとかして、この一人の殿下を立派に育てしよう、立派な模範的な日本人になっていただく、という気持でいっぱいになっておられることを事ごとく感じました。

こんな純粋な気持の方々の集まりは、なかなか世間に見当らないと思ひ、心から敬服しておりました。学校で何かの運動チームに属し、選手生活をされた方々にはよくおわかりと思ひますが、非常に気持の一致した運動チームの気分と、この東宮職の方々の気分とは、一脈相通するものがあると思ひました。

前置きが大変長くなりましたが、次に掲げるのは、私が殿下の御練習、その他に關して、日記に書いておいた中から、若干書きぬいたものです。なにぶん、今から二十年も前の話ですが、学生時代の殿下の御生活の一端が少しでもうかがえれば幸いと思ひます。

昭和二十二年十月六日（月）

午後一時、東京駅中央線プラットホームにて、松平康昌氏と落ち合い、小金井へ行く。駅より出迎えの自動車にて東宮仮御所へ着く。有名な小金井の桜堤より徒歩七、八分の所で、ちょうどゴルフ場とは道一つへだてた隣りになる。御所とは名ばかりで、質素な平屋建ての日本家屋で、学習院中等科の仮校舎も同じ敷地内にある模様。

東宮大夫穂積重遠氏、戸田、角倉兩侍従に紹介されて、雨中、学習院中等科のコートおよび御所の内庭のコートを検分していろいろ打合せをした。しばらくして皇太子殿下がお見えになり、御挨拶申し上げた。侍従さん方も一緒に約十五分くらい雑談し、現在御使用中のラケットや握り方などを拝見した。水泳で大いに鍛えられたよしで、色黒く御健康そうに拝した。茶菓をいただき、毎週、木曜日午後二時から練習のことに決定した。お煙草を頂戴し、松平氏と共に帰る。

今回、殿下のお相手を選ぶに際し、慶應のOBから選ぶことをまず第一に考えたが松平氏はいわれた。これは慶應庭球部ならびにOBにとり、まことに名誉なことであって、責任も重大だと思ふ。テニスの技倆からいえば他に適任者もあったと思ふが、自分が選ばれたのは、年配や勤め先の都合などもあったのであろう。ともかくも、お引き受けした以上は、技術はもちろんのこと、テニスを通じて殿下が立派なスポーツマンシップを体得されるようベストをつくす決心だ。幸い小泉先生が御教育参与として御在任なので心強い。

十月十六日（木）小金井コート

練習第一日、午後二時より仮御所敷地内の紀元二千六百年記念館（宮城前に建てたもの）の一室にて、テニス映画（スローモーション）のジョンストン、ヘレンウィルス、フランス三名手の三巻を映写し、御説明をする。

それよりコート（クレイ）に出て乱打をする。ネットも軟式の白いもので、ボール等も不完全であるが、追って改造の予定のよし。殿下はそれまでに軟式のテニスをおやりになったので、ある程度フォームはできておられるが、まだ腕力もお弱く、身体の動きも敏捷というわけにはいかない。しかし、俗にいう「呑み込みの早い」よい運動神経をお持ちであることがすぐわかった。

ユニホームを召さず、学習院の制服の上衣を脱がれたままであり、他のお相手の侍従、侍医の方々も背広の上衣を脱いだ姿なので、練習が終ってから今後は全員白のユニホームにせられたき旨、御注意申上げた。

野村教育主任、佐藤、緒方両侍医に紹介せらる。練習用のヒモ付きボールを殿下に差上げる。どうもなんとなくこちらがテストされてるように感じて神経が疲れた。帰宅して、今日の模様を母に話したら光栄の至りと大変喜んだ。

十月二十三日(木) 小金井コート

今日は殿下を始め、お付きの方々も、みな白のユニホームにて気持がよい。庭球協会から、ボールダーズを献上した。サーヴィスの練習をしたがなかなかむずかしそうである。バックハンドは呑み込みがお早く、少しは返球できるようになられた。毎日、学校のコートで級友と練習やゲームをやられるよしなので、一週間たつうちに、せっかくお教えしたフォームがこわれるような気もする。終了後、お風呂をいただき、ふかし芋を御馳走になる。侍従さん方が御所の畑で作られたものらしい。穂積大夫、野村御教育主任など、終始コートの傍で見学された。

十一月十六日(日) バレスクラブコート

今日は宮城内に新たにできたバレステニスクラブのコート開きが行われるので家族を連れて行く。

一時半、両陛下、皇太子殿下、三内親王殿下がお馬車で来場された。お馬車から降りられた所で、戸田侍従の介添えで陛下に拜謁した。「東宮さんにテニスを教えておられる石井です」と戸田氏が申上げたところ、陛下はすぐにソフトを右手で脱がれて、「東宮さん(東宮ちゃんといわれた気もする)がいつも世話になってありがとう」とのお言葉があった。まことに光栄の至りで、

責任の重きを感じた。

お席では両陛下の間の後方に熊谷一弥氏、天皇陛下と皇太子殿下の間、後方に自分が坐った。マッチは藤倉―中野のシングルス。山岸・鶴原―鶴田・藤倉のダブルス。女子は井上、加茂、朝長、原の四人であった。殿下には主として技術的な御説明を申上げた。陛下からも時々、御質問があった。四時頃、おそらいで御帰還された。帰宅して母に報告したら、テニスの好きだったお父さんが生きていたら、さぞ喜んだらうという。まことに同感である。

十二月二十四日(水) 十一時半より小金井

昨二十三日は殿下のお誕生日なので、今日はそのお祝いに先生方をお招きになり、自分もテニスの先生ということとその光栄に浴した。戸田侍従にあらかじめ伺って平服とのことだったので背広で伺ったところ、応接間に集まった人たちはほとんどモーニングなので、これはしまった、テニスマンは礼儀を知らぬと思われては大変、と心配したが、あとから現われた小泉、安倍、坪井、山梨といった御教育参与が皆、背広だったので、やれやれと安心した。右の方々のほかは、中等科の受持の先生と習字の先生、音楽の小松耕輔氏、美術の児島喜久雄氏、また弓の大内先生と馬の小林先生も見えた。そのほか、侍従や侍医の方々を入れて二十三、四人か。

御酒は宮内庁御用とあって結構なものらしいが自分にはよくわからない。お料理はまことに御質素で、ほんとうのところ驚いた。大鯛の尾頭つきとまでは行かなくても、小鯛ぐらいはお祝いの印にあるものと思っていいたら、まったく意外なことで、配給もの以外はお使いにならぬように拝察した。大きな声ではいえないが、民間で得意さんを接待するときの閑料理を思い浮べ、申しわけないような気がした。試みにメニューを書いてみよう。

こはだの粟づけ二切れ、蒨菘草(ほうせんそう)のおひたし、人参とごぼうの煮付け、小魚と蒨菘草のお汁、半月の煮付け、お新香、御飯は盛りきり一杯、みかん一個、おしるこ(お餅でなく白玉)、以上。

しかし一同愉快に雑談、途中から殿下もお出ましになり、先生方の少し赤い顔をニコニコして御覧になっておられた。安倍能成氏は殿下と握手をして：“You are 50 years younger than me”と申上げ、モシモシ亀よの歌を全部唄ってお聞かせたのには驚いた。than meはおかしいと誰かにひやかされていた。十五分くらいおられて殿下はお引取りになった。そのあと、安倍さんの謡や穂積さんの芝居の声色なども出て、四時頃解散。小泉先生は例によって差されれば決して辞退されずよく飲んでおられた。帰りはお供して三田のお宅へ伺い、御書齋で一時間くらい、奥様も御一緒で雑談して帰宅した。

昭和二十三年一月十五日(木) 小金井

冬でコートが使えないので練習はずっとお休みのところ、お電話があって、またテニスの話を
するようにとのことなので、午後から御所へ伺った。

この前はテニスの歴史から始まって、有名なデヴィスカップ試合の話とか、いろいろの国際試合における日本選手の活躍状況などをお話し申上げたので、今日はテニスのルール、コートマナー、試合の時の心得、試合に際し立派なスポーツマンシップを発揮した内外選手の実例などをお話しした。なにぶん、話の泉でなく話の水たまりの程度なので、あまり面白いお話も申上げられず、恐縮した。そこで、この次は熊谷一弥氏にお願いして海外の実戦談を伺うことにした。

なお、テニスの試合に限らず、他のいろいろな競技も、ルールを一通り御理解していただき、特にラグビーや野球のような団体競技をできる限り御覧下さるようおすすすめした。テニスにもダブルスはあるが、どちらかといえば個人的競技なので、皇太子殿下がもっと団体競技を体験する必要はないかとの御下問が陛下からあった由を承わったからだ。

六月十三日(日) 小金井

かねてからいい試合を殿下に御覧に入れたいと思っていたが、今日それが実現した。藤倉、鶴田、中野、隈丸の四君に来てもらって、単・複各一試合を見ていただいたのだ。その後、藤倉、中野が殿下の乱打のお相手をした。相手がデ盃選手だろうが恐れることなく、平生通りにおやり下さいと申上げたところ、いいフォアハンドをドンドン打たれるので感心した。あとで選手たちが、殿下はもっとお下手なのかと考えていたら、とてもよくお打ちになるので驚いた、といったので、コーチの自分としては満足であった。藤倉は、殿下は身体がやわらかく、勘がなかなかおよろしいと聞いていた。

日本一の隈丸の親指が短くて、彼の打法には都合がよいという話が出て、世界一のチルデンは中指が半分しかなく、また水泳の古橋もどの指かが半分だという話になった。とたんに、緒方侍医が「殿下が名選手になられるように、お望みなら指を切って差し上げましょうか」と申上げたので、殿下始め一同、大笑いをした。

五時頃、一同にお煙草と日本酒を賜わり、自分は小泉先生のお宅へ寄って、頂戴した日本酒で先生と喋りやうと思ったが、あいにく御来客だったので、玄関で今日の模様を報告して帰宅した。

十一月十一日(木) 小金井

今日は三時から小泉先生がお見えになるというので、張り切って、しかし少し心配しながら御所へ行った。スラゼンジャーボール四個入りの罐かんを献上した。ボールは配給制で、いつも不十分なので、殿下もお喜びのようであった。一通り乱打を済ませ、ボレーの練習の時に小泉先生が見えた。殿下もいささか固くなられたようだったが、コーチの方も、先生の御批評がこわいわけ

もないが、少し固くなる。試合を二セット殿下とやり、先生が審判をされた。お茶の時に穂積大夫も御一緒に、先生がいろいろ殿下に質問しておられたが、なかなか興味のある問答であった。

夕方、またサーヴィスとボレーの練習をやる。殿下にはサーヴィスがどうも一番むずかしいように思われる。夕食を戸田侍従といただく。今日は小泉先生の御進講があるというので陪席させていただいた。題は「福沢諭吉の帝室論」であった。殿下は一時間以上にわたって、終始身動きもされず、端然として講義を聞いておられたので敬服した。実をいうと、自分などは昼間のテニスの疲れもあり、元来、教室は苦手なので、ジツとしておられなくてまことに困った。

御進講が終ってから、雑談に移り、テニス、野球その他スポーツの話がだいぶ出た。先生が学生時代、テニスばかりやっていて落第しかけた話などは初めて伺った。八時半頃、先生のお供をして帰る。穂積さんや佐藤侍医、清水侍従も途中まで、御一緒に帰った。

車内で先生とコーチの方法についていろいろと意見をたたかわした。お付きの方々だけでなく、もう少しうまい、ボールの続く人を助手にしてゲームをやったらどうかとのこと。最近、殿下が長足の進歩をされたので、自分もそのことを考えていたところだった。

先生曰く、「殿下のボレーの練習を今日見て、あまり上手になられたので驚いた。まだ欠点はたくさんあるが、とにかく、テニスぶりも品格があり、ことにフォアハンドの球ばなれは君よりいいよ」と。いわゆる王者のテニスらしい、堂々とした風格を持ったテニスを殿下にやっていただくような心がけて来たが、今日、先生から、テニスぶりも品格があるといわれて安心した。まづ一年間の苦勞の甲斐があったというものだ。

先生のお宅で一休みして、御一緒にウイスキーの盃を挙げ帰宅した。昼間は弟子がテニスのコーチをして、夜は師が福沢論吉の帝室論を講じ、相携えて皇太子の御教育を論じつつ帰るとは、まことに楽しい一日であった。

十一月二十五日(木) 小金井

今日は藤倉君に乱打のお相手をしてもらって、自分が殿下のわきに立ってコーチをしたが、なかなか能率が上がってよかった。二十八日の日曜日に学習院中等科と成蹊中学とが、吉祥寺の成蹊のコートで試合をすることになったよし。皇族方で御出場なさるのは今までに例のないことによるだが、殿下御自身で御出場を決断されたのだから何事も御経験でよいと小泉先生もいわれ、自分ももちろん同意見であった。

試合の時の心得を侍従さん方が心配されて、殿下にお話するようにとのことであったが、コートマナーその他一般のことは過去一年間の御練習の間に充分おわかりと思うから、あらためて申上げる必要はない旨をお答えした。

勝敗を度外視して戦うことが、フェアプレーのようになっているが、勝っても、負けてもどちらでもよいという気持で試合をやるのは相手に対して非礼である。定められたルールのもとで、正々堂々と相手を負かすために全力をつくす。しかも、勝負が決まったら、勝って驕らず、負けていいわけをしないというのが真のフェアプレーの精神で、このことは、常々、殿下によく申上げてあった。なお、マッチが終ったら、審判にちょっと札をされるように御注意しておいた。試合ぶりを拝見したいと思ったが、「先生の来るのは困るよ、少し困るなア」としきりにいっておられたので御遠慮することにした。

(注) 後日、黒木侍従から伺ったら、殿下はダブルスの二位に出場され、第一セットを取られて第二セット四一からよく頑張って盛り返してセットオールに持ち込まれたが、ファイナルセットで惜敗。失敗は審判に礼をするのをお忘れになったことの上よし。

十二月二十四日(金) 小金井

昨日の殿下のお誕生日のお祝いに、昨年同様小金井の御所で午餐を賜わるとのことなので、一時半、小金井駅に集まる。

今日は安倍、山梨両参与は御欠席でいささか淋しかった。小泉先生が殿下の正面、昨年は殿下は途中十五分間くらいだけお出まされたが、今年は初めからお席に着かれ、盃をあげられて皆の祝辞をお受けになった。殿下の右隣りが坪井先生で、その隣りに自分は坐った。昨年よりもお料理が少しにぎやかになったことは国力回復の徴であろう。

小泉先生が一同を代表して御祝辞を申し上げ皆で乾盃。小松耕輔氏は昨年通り、たちまち酔って、謡曲と都々逸(これは少し殿下の御教育上悪いかナといいながら)をやり、あとは全部の人が何かやるということになった。穂積大夫の芝居の声色はいつもながら堂に入ったものだった。殿下は山田侍従ともう一人の方と三人で、学習院の歌を腕を振ってお元気に歌われたので嬉しかった。自分は慶應庭球部の歌がまだできたばかりで自信がないので、ラグビーの歌を歌った。

一巡して何もやらないのは小泉先生だけ、となったので、小松さんがしきりと小泉先生を責める。さっき、御祝辞を申し上げたからいいではないかと先生がいうと、あれは芸のうちにはいらなといったって承知しない。小泉さん、何かやれよといって責める。見るに見かねて自分が立って、例の鉄幹の「妻をめとらば才たけて、みめうるはしく情けあり」を先生の代役と称して歌ったので、どうやら無事に納まった。一同、なごやかすぎるくらいになって三時頃解散。帰りは小泉先生の車へ坪井先生と便乗。

昭和二十四年

十一月二十九日(火) 小金井

かねて懸案となっていた女流選手によるお相手を今日は実現した。小泉妙子、山岸桃子(成二氏夫人)と石井梯子が今日は参上した。二十代、三十代、四十代の女のサンプルを御覧に入れたわけではないが、いろいろの意味でお相手の選択はむずかしい。小泉先生、野村大夫もお見えになって熱心に観戦された。主として試合をやったが、殿下のサーヴィスは前半はなかなかよく、ストロークも思い切って、よくお打ちになった。女軍から何かいつもの毒舌が聞かれるかと思っていたが、殿下のテニスに感服していたので、コーチとしてはまず及第か。

練習後、皆でおすしをいただき、殿下も途中からお出まし下さってありがたかった。今日もいろいろショットを覚えられたと思う。

昭和二十五年四月二十四日(月) バレスクラブコート

今日は上京中の原田武一先輩に来ていただいて、かつて、フランスのラコスト、コシエーを打ち負かしたウエスタングリップのフォアーハンドを殿下に御披露した。殿下も御一緒に乱打をされた。リストをもっと使うようにと原田氏はいうが、殿下の場合はちょっとまだ研究の余地があると思う。いったい、オメエは何を教えるんだ、と例の口調で叱られはしないかと内心心配していたが、だいたいにおいてよろしいとのこととホッとした。自分が平生申上げている通りのことを原田氏も殿下へ御注意していた。小泉先生も今日はおいでになり、怖い人が二人もそろったので、石井先生も大いに疲れた。

五月十六日(火) 吹上御所コート

今日は午後二時半から、バレスクラブコートで行われた全関東庭球選手権大会を御覧になった。そのあとで御練習の予定だったが、見物人が沢山いて、どうも落ちつかないので、皇居内の吹上御所のコートを使うことになった。御文庫と称する両陛下のお住居のすぐ裏で、アンツーカーのコートである。ほとんどお使いにならないと見えて、草が少し生えているが、なかなかよいコートであった。周囲は原始林のような雑木林で、これが東京の真ん中とは思えない深山幽谷の趣きに驚いた。

練習の途中で、天皇陛下がお見えになり、十分間位、殿下のテニスを御覧になっておられた。大分、おふとりになって、少しお顔の色がお悪いようにお見受けした。あとで、戸田侍従から伺ったが、東宮さまが大分うまくなられたとおっしゃった由。義宮御殿でお風呂を頂き、戸田さんと一緒に丸ビルへ寄った。

五月二十二日(月) バレスクラブコート

今日はバレスクラブコートで四時頃から往年のダブルスの名手、安部・河尻組を迎えて、ダブルス二セットをやってもらった。風が強いせいもあって、殿下のストロークは安定せず駄目だったが、そのあとの乱打の時はだいぶ当りが出てこられた。五時半頃、練習を切り上げて、一同で常磐松の御所へお供した。正式の御陪食ということで、小泉先生、野村大夫も御一緒だった。

席上、文字通り珠玉の言葉ともいうべきものが安部、河尻両君からも出て、殿下にもいろいろ御勉強になったと思う。早く、この御所の中にコートができて、両君のような人間的にも立派なプレーヤーに、時々は来てもらえるようにしたいものだ。

六月二十五日(日) 吹上御所コート

三時に義宮御殿に伺い、ユニホームに着替えて、先日の吹上御所のコートへ行く。ネットは例

のようにチャチなのだが、コートはこの前と違って手入れがよく出来ていた。かねて話には聞いていたが、雉子が沢山近くの林の間を歩いている。練習の終り近くに、両陛下がお見えになって、殿下と戸田さんとのシングルスを御覧になった。戸田さんがネットへ出たのをロップで頭を越すなど、大分ゲームに余裕が出られたようだ。皇后陛下へ御挨拶申上げ、少しテニスの話をした。グリップ、スウィング、ガット等について御質問があった。お若い時に両陛下も御一緒にテニスをなさったように伺っていたが、何でもよく御存じなので驚いた。

帰りに、御文庫の玄関に両陛下はお立ちになり、皇太子さまの自動車をお見送りになられたので、同乗している自分は、何となくもったいないような気分になった。義宮御殿でお風呂を頂き、常磐松御所へ殿下と御一緒に伺う。新設のコートは、大体出来上ってすばらしくよい。来月三日に、コート開きのことに決めて頂いた。

八月八日(火) 軽井沢プリンスホテルおよび千ヶ滝コート

よく晴れて暑い。ヴァイニング夫人に初めてお目にかかる。大きな人だが、お年のわりに、お嬢さんお嬢さんしておられる。黒木侍従などから寄宿舎のプランについて御相談を受けた。昼食は小泉先生も御同席、二時半からテニス。今日は、殿下は裏道をお歩きになって学友の山本君(山本五十六元帥の令息)の家へ寄られ、それから千ヶ滝コートへ行かれた。いつもの殿下・永瀬組対山本・織田組とのダブルスをやる前に少しサーヴィスの練習をなさる。ゲームになって効果観面で、殿下も練習の有難味がよくわかられたと思う。

六一二、八一六で勝たれ、次は六一三で負け。ストロークはあまりよくなかったが、ボレーは、フォアー、バック合計七、八本よいショットを出された。とにかく恐れずにネットへ進まれるようになられたのは一進歩だと思ふ。殿下は少し早く切り上げられ、また歩いてお帰りになったので、自分は残って山本君等と練習をして、六時頃ホテルへ帰った。

明朝、殿下のお供で山へ行く御学友千家、橋本両君が到着した。五日間、プリンスホテル滞在中、二日は雨で駄目だったが、小泉先生と毎日、お話ができたのは幸いであった。練習が出来た三日間で、殿下は技術的にはあまり効果はあげられなかったが、実戦的訓練にはなったことと思ふ。明朝、また先生と奥様のお供をして自動車で帰京の予定。この次は十九日(土)から二十二日(火)まで、また軽井沢へ出張のつもり。

八月十九日(土) 軽井沢プリンスホテル

昨日から休暇をとって軽井沢へ来たので、今日は午後からプリンスホテルへ伺い、お相手をした。一昨年は、十日間近く滞在して雨に降られたことを思い出した。あの時は、千ヶ滝のバブリックコートだったが、今度はホテルの中にコートが出来たので便利だし、見物人がいないので、

殿下も楽なお気持でプレーをされて結構だと思った。仲間は何によって山本、千家、織田の三君に山座君。みんな上手になって、一昨年とは見違えるようだ。一応の格好はついてダブルスらしいゲームをやっていた。殿下もこれだけおやりになれば、どのクラブへ行かれても御自分も楽しみ、相手も楽しませうと思うと嬉しくなる。

小泉先生御夫妻も万平ホテルに御滞在中なので見に来られた。夜は馬術の小林先生も御一緒に御陪食があった。今度は、食事の分量もなかなか多く安心した。一昨年は少なくて、お腹がへって困った話をして皆大笑いをした。

食後、応接間で雑談をして、帰りは自動車で旧軽井沢の家まで送って頂いた。

あとから調べたら、今日でお相手が丁度百回ということが判った。

十一月二十日(月)常磐松コート

今日はまったく、久しぶりにお相手をした。もう三時をすぎると空気も冷たくなってくるし、最近の殿下のお体の調子も考えて、だいぶ調子をおとして、なるべくゆっくり乱打をした。坪井先生、松平信子氏、小泉先生、野村大夫、戸田侍従が御観戦された。なかなかよくお打ちになったので、坪井先生に、「どうですか、だいぶ、お体の動きがスムーズになられたでしょう」と伺ったら、「しばらく拝見しない間に急速な御上達で驚きました」とのことだった。

途中で前東宮大夫の穂積先生が米国から帰朝の御挨拶に見えられ、殿下のフランス語の御勉強のためにといって、フレンチ・イングリッシュ・ディクショナリーをお土産に献上された。なお、「私は最高裁判事として、田中長官等と一緒に渡米いたしましたので、到る所で歓迎を受け、新聞社のカメラマンにつきまとわれました。いつ、どこで写真に撮られるか油断ができないということの辛さを体験しましたので、殿下には一層、御同情申上げております」というようなお話を穂積さんはしておられた。

昭和二十六年三月二十四日(土)常磐松コート

いろいろの御都合や雪などで、だいぶ長い間御練習がなかった。今日は御練習をかねて、デ盃選手壮行のために熊谷監督、中野、藤倉、隈丸がお招きをいただいたので、それに山岸二郎をくわえて、午後一時、御所へ上った。小泉先生も見えておられ、殿下もわれわれと一緒にプレーをされた。山岸・隈丸対中野・藤倉のダブルスを御覧に入れたが、セットオールで七―五で藤倉組が勝った。殿下は山岸や隈丸を相手に乱打をされたが、しばらくぶりのわりによくお打ちになり、ことにバックハンドはよいショットを出された。やはり、御成人と共に腕力や走力が強くなられたのも一つの原因だと思う。殿下のフォアのエラーに対し、熊谷さんは、ボールの取り所がおくれているといわれ、隈丸君は、前すぎるから不安定になるという。なかなか調節に骨が折れ

る。

練習終了後、別室で壮行の乾盃をしていただいて一同退出した。

六月四日(月) 常磐松コート

どうやら一カ月ぶりになってしまった。もっとも先月は自分の関西出張があったため、こちらから休ませて頂いた日もあった。戸田侍従は落馬のため、胸や背中が痛み、テニスは出来ないよし。それがもとで万一病気にでもなられたら大変と心配になる。

今日は殿下はすばらしい調子で、いわゆるコンスタント・スピードで左右へ打ち分けるといことがおできになって、御自分でもいかにもお嬉しそうだった。コーチとしてはこの調子を固めるために、あと二、三日続けて御練習になればいいと思うのだが、残念ながらそれができない。しかし殿下はすでに、どこでプレーされても恥かしくない程度になっておられるのだから、まあ我慢しなければならぬ。

昭和二十七年七月十五日(火) 常磐松コート

今年初めてのお相手。もっとも学友や東宮職員をお相手としてプレーはお続けになっておられたようだ。

平和条約が出来て日本も独立したので、各国大使が公式に東宮御所へ伺候することになり、それに火曜日の練習時間が振り向けられることが多い結果、とうとう今日までお暇が作れなかったというよし。

今日は千家君が来たので、殿下・千家組と戸田・石井組でダブルスをやった。なかなかゲームに強くなっておられ、いろいろなボールの処理もだいぶ上手にならているのに驚いた。セット二―一で戸田・石井組リード、第四セット五―四の時、どうもあやしいと思っていた殿下の足がサーヴィスの時變ってしまつてコートに倒れた。戸田侍従や自分は別に驚かないが、警衛の人たちはビックリして駆けよるといふ場面となった。そのまま靴をぬいで親指を上へ押し曲げればすぐ直りますよという、千家君がその通りにした。殿下は足が變ったことがありますと答えられた。と伺うと、コートの上に仰向けに寝られたまま、水泳の時に變ったことがありますと答えられた。そのうち、どうやらお痛みもとれたので立ち上がられ、さあ、もう今日はこれまでにいたしましよと申上げると、いや、まだやれますといわれ、戸田さんも、それはいい傾向だから、やりましよといつて、ゲーム再開。足を變られたあとにしてはよく動かれて、いいボールを打たれたので感心した。結局、戸田・石井組が六―四で勝った。

〈追記〉

昭和二十七年は前掲のように七月までに一度しかお相手できませんでしたが、夏はまた軽井沢プリンスホテルへ、数日お相手に伺いました。

十一月十日の立太子式、翌二十八年の英国女王戴冠式御参列と、殿下はますますお忙しくなられて、毎週一回という定期的コーチは、自然なくなりましたが、その後も時々はお相手に伺い、殿下は真面目な御練習をお続けになって、毎日トーナメントや軽井沢、鎌倉のトーナメントにもたびたび御出場になり、いつも三回戦くらいまでは勝ち進まれました。

テニスには水泳などと違ってレコードがないので困るのですが、本来、点数のからい熊谷一弥氏や安部民雄氏のような権威者がいい点をおつけするのですから、殿下のお腕前は立派なものと思えます。

三十三年には日本で一番歴史の古い麻布の東京ローンテニスクラブの会員となられ、各国大使との御交歓や、クラブ内トーナメントなどで活躍しておられます。御成婚後も、時には妃殿下も御一緒に楽しく熱心にプレーを続けておられますことは、最初のお手ほどもきを申し上げた自分にとってはこの上もない喜びでございます。

小泉先生は、『私の履歴書』という著書の中で、十五の年に、ほんの偶然の機会に始めたテニスというスポーツによって、私の生涯の経歴が左右されたといひ得る、と書いておられます。考えてみるとわが皇太子殿下も、中学のはじめ頃に、偶然お始めになったテニスというスポーツによって、その御生涯の御経歴が左右されたといってもよいと思えます。当時の小泉先生の次の言葉がよくこれを物語っております。

「この度の御婚約をテニスによって結ばれた御縁などいいそやすものがあれば、それはあまりに通俗的な想像であるが、しかし何事にも慎重で堅実な殿下が正田嬢をテニスコートで御覧になる機会を得られた事は、少なからず、殿下の御判断を助けたことと思う。まことに仕合せな次第であった」

〔文藝春秋〕昭和四十四年十一月号



昭和35年頃 東京ローンテニスクラブでの両殿下



昭和53年 御一家お揃いで(東宮御所コート)